

京都大学	博士(文学)	氏名	鬼 頭 葉 子
論文題目	後期ティリッヒの宗教思想における歴史と共同体の再構築 — 時間・空間概念を手掛かりに —		
(論文内容の要旨) 本論文は、パウル・ティリッヒの宗教思想、特に後期ティリッヒ思想(1946年～1960年)を中心に、共同体における社会理論(共同体論・政治理論)と、終末論を含めた歴史論に注目して論じたものである。社会理論と歴史論を、各論としてではなく、それぞれを構成する「時間」と「空間」の概念を手掛かりに有機的に関連づけることを試みた。また従来の研究では、ティリッヒの思考において歴史論と存在論が矛盾し、思索の整合性を壊すとみなす見解も多いが、本論文では、後期ティリッヒ思想、特に『組織神学』における歴史論は、存在論と相互補完的な関わりを持つという筆者の仮説の論証を試みた。そしてティリッヒの社会理論と歴史論を取り上げる際、ティリッヒが自らの基盤としつつも超克しようとした「近代」という時代状況に注目し、社会理論・歴史論と近代との関わりを明確化することも、本論文のもう一つの課題とした。 論述は以下の手順で行った。まず歴史を構成する時間概念と共同体の領域を構成する空間概念について明確にし、歴史と共同体の構造・諸問題を把握した。それをもとに歴史と共同体の関係性、さらに歴史論と存在論の連関を解明した。 第1章では、ティリッヒ研究の現状分析に基づき、後期ティリッヒ思想を再考する必要性と、後期ティリッヒ思想の特性を指摘した。後期ティリッヒ思想における存在論と歴史論の相互補完性について検証するため、後期ティリッヒの中心的著作『組織神学』を主要テキストとした。その理由は、『組織神学』第一巻・第二巻における存在論を中心とした記述に対し、第三巻では生のダイナミクスが展開されるが、生を叙述するためティリッヒが用いた時間概念・空間概念が、存在論と歴史論を結びつける鍵となるからである。 第2章では、後期ティリッヒ思想における「近代」の継承と超克について検討した。ティリッヒは、「人間の理性による自然と社会の支配」を特徴とする「近代」がもたらした権威からの解放や、自律的人格の概念については肯定するが、「近代」の進歩信仰や調和信仰の限界をも指摘する。この点でティリッヒは、マルクス思想とも共通するものの、マルクスにおける水平的思惟を批判し、宗教社会主義の垂直的次元に基づいて社会正義を要請することを試みた。正義はそれが待望され準備されることと、当為を要請することが結びついて実現可能になる。この結合が生じる瞬間は、カイロスとしての時間概念で表され、クロノスとは区別される。カイロスという特定の時間において、先行する歴史と(準備)、人間の自由に基づく行為(当為)によって、新たな歴史が形成される。			

第3章では、共同体の「構造」―空間に関する事柄①―について検討するため、前期・中期ティリッヒ思想における共同体についての思索（宗教社会主義）を概観し、その知見と比較しつつ後期ティリッヒ思想の特徴や形成過程を抽出した。ティリッヒは、エロース的關係に基づく共同体が崩壊した後（近代以降）に生じた、起源回帰の問題点を指摘する。近代自律意識は起源の束縛を破壊したが、空間のエロースをも破壊したことによって、逆に特定の空間に基づく地縁血縁に由来する起源への回帰を招いたのである。あらゆる現在するものの根源が「存在すること」である所以から、空間と存在論は結びつくが、空間は時間によって破られる可能性をもつ。新しいものを待望する時間概念は、存在の行方と当為についての問いを形成する。1933年を中心とするティリッヒの宗教社会主義において、歴史論と存在論は対抗関係（時間と空間の抗争）にある。後期ティリッヒでは、新たな共同体形成の可能性は、特定の空間を超え、究極的関心に基づく「靈的共同体」へと継承された。

第4章では、共同体における「諸問題」―空間に関する事柄②―を明らかにするため、後期ティリッヒ思想における道德の問題を扱った。ティリッヒは道德と宗教の相互關係性を論証することを試みるが、これは当時の教会の状況と、倫理学説（価値論や、カントの實踐理性など自律的理性のみに基づく倫理）の限界から生じた問題点であった。ティリッヒは道德の源泉や動機となるものを「アガペー」として、道德における宗教的次元を主張し、倫理相對主義を超える道德の可能性を見出している。

第5章では、歴史の「構造」―時間に関する事柄①―について、カイロス論を中心とした前期・中期ティリッヒ思想における歴史論の展開を踏まえ、後期ティリッヒの歴史論の特徴と重要性を指摘した。後期ティリッヒにおいてカイロスの熱烈な主張は薄れたものの、実存にとっての歴史の意味について、「神の国」の象徴によって答える試みがなされる。ティリッヒは「神の国」の象徴によって、人間の「政治的・社会的生」を表現し、生が時間的広がりを持つということは（歴史的な生）、同時に空間的広がりを持つということを示す（政治的・社会的な生）。ティリッヒは、神の国を政治的・社会的象徴とすることによって、社会的・政治的取り組みを組織神学体系において行おうとしたのである。従って、ティリッヒの歴史論は実際の社会や政治とかけ離れた抽象的なものではなく、十分に検討する価値のある内容を備えている。

またティリッヒが『組織神学』第三巻で中心化する「生」は、本質と実存の混合であり、本質と実存の実際の現れである。「生」に対して、本質と実存はそこからの「抽象」である、とティリッヒが明言しているように、『組織神学』第一巻・第二巻は現実を抽象化した記述であり、第三巻は抽象の具体的現れとしての生を記述する試みである。『組織神学』第一巻・第二巻との一貫性を持ちつつ、抽象としての本質―実存構造をさらに内包して現実化する生は、現実化されたものゆえ不可避に時間的空間的要素を有する。人間を含めた存在者は、存在論で記述されると同時に、時間・空間のなかで歴史的・共同体的生を有する。『組織神学』においては、人間は存在論と歴史論か

ら語りうる、というティリッヒの信念の現れを見て取ることができる。

第6章では、歴史における「諸問題」―時間に関する事柄②―を扱った。後期ティリッヒが提出する中心的問いである「歴史の意味についての問い」、実存にとっての歴史は有意味であるか否かという問いを検証し、歴史相対主義の問題を共有する同時代の哲学者らの見解との比較によりティリッヒの論点を明確化した。ティリッヒの歴史解釈は、実存の歴史行為と切り離して問うことはできない。歴史的真理は信仰の真理であり、ティリッヒの歴史解釈の根底には信仰の要素がある。ティリッヒの歴史解釈には確かに悲劇的な側面があるものの、ティリッヒの歴史観において、歴史的実存の行為なくして歴史の解釈もありえないため、歴史的実存の歴史における行為・参与は推奨される。

歴史の終わり（終末）においては、時間・空間も終わりを迎える。ティリッヒは歴史の終わりにおいても、歴史の意味の問いへの答えとして顕れる神の国の象徴を再解釈しようと試みる。一方、歴史の内なる神の国を中心的に顕すものは、「歴史における神の国の中心的顕示」としてのキリストである。前期ティリッヒ思想では、歴史の中心としてのキリストが歴史論と関連して強調されるが、この立場は後期ティリッヒでは後退しているというのが、本論文の立場である。逆に「神の国」の象徴は強調され、終末論へと焦点が移行している。

ティリッヒの終末論について、「存在論的」「現在的」に過ぎるという批判は多いが、本論文の立場は以下の通りである。ティリッヒは弁証法神学が試みた終末論の現在化を引き継いでおり、ティリッヒが強調する終末の現在的側面において、実存はすでに今ある永遠の次元に憩うと同時に決断へと押し出されていく（宗教社会主義のような具体的な指針は示されない）。しかしティリッヒは終末論の徹底した現在化を主張するわけではなく、時間の水平的次元も考慮されている。また本論文では、終末論におけるティリッヒの「本質化」概念に注目し、普遍的参与が可能か否かという点等に関して問題点を指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

ティリッヒ(1886-1965)は、20世紀を代表するキリスト教思想家の一人であり、その影響は、神学や宗教哲学の分野はもちろん、宗教学、精神分析学、芸術論、社会思想など広範囲な思想領域に及んでいる。1980年代以降のティリッヒ研究は、近年新たに参照可能になった草稿や講義録などに基づいた初期から前期の思想研究(1933年アメリカ亡命以前のドイツ語文献の研究)を中心に展開してきたが、現在、こうした初期前期思想を、1980年代以前のティリッヒ研究の主たる研究対象であった後期ティリッヒ思想と統一的に理解することの必要性が意識されつつある。本論文は、こうした初期前期思想についての近年の研究成果に基づいて、『組織神学』(1951-1963年)を中心とした後期思想の再評価を目指しており、今後のティリッヒ研究を先取りするものと言える。

後期ティリッヒ思想の再評価という課題に取り組むには、初期から後期までのティリッヒの一次文献を精読することはもちろんのこと、この50年あまりの間に公にされた膨大な二次的研究文献を視野に入れることが要求される。本論文の論者は、この困難な作業を着実に遂行し、後期ティリッヒ研究の研究状況を明瞭に描き出すことに成功している。ここに、ティリッヒ研究における本論文の最大の意義を指摘することができる。今後のティリッヒ研究は、本論文第1章に提示された研究状況の分析に依拠しつつ、進めることが可能になった。

本論文の第二の特徴は、第1章における研究状況の分析に続いて示された問題設定と、それを展開した第2章の記述に認められる。近代以降のキリスト教思想は、啓蒙主義的近代が生み出した思想状況への適応、様々なキリスト教批判への応答、そして全体主義の出現に至る社会変動への対応といった課題に直面することになる。論者は、こうした近代以降の思想的課題に正面から取り組んだ思想家としてティリッヒを明確に位置づけ、その思想的特質と意義を、後期思想における共同体論と歴史論の再構築によって明らかにしようとしている。その問題設定の妥当性と明瞭さは、本論文の水準の高さをよく示しており、特筆に値する。

以上の序論的考察に基づいて得られた本論文の主要な成果として、次の点が挙げられる。

第一は、後期ティリッヒの特徴としてこれまで多くの研究者が指摘してきた存在論が、通常批判されるような仕方で、聖書的な歴史的思惟と単純に対立するものではなく、むしろ、『組織神学』全体(とくに第三巻)を精密に分析することによって、ティリッヒの歴史論と相互補完的な関係にあることが示された点である。存在論はその具体化として歴史論を要求し、歴史論は存在論を基盤にするという関係である。存在論的神学という特徴付け、あるいはそうした仕方で批判は、ティリッヒの思想体系の部分的な評価の結果であり、ティリッヒ思想の正当な評価は、初期前期からの思想展開を踏まえ、『組織神学』を一つの全体として分析することによって初めて可能になる

ことが、説得的に示された。

第二は、相互補完的な存在論と歴史論、あるいはその基礎的範疇としての空間と時間とが、ティリッヒの共同体論においてどのように関連づけられているかが論究された点である。ティリッヒの共同体論は、宗教社会主義の正義論やカント以降の道德論との関わりという思想的射程を有すると同時に、キリスト教神学における霊的共同体の理解にも連なる問題であり、この点に関して集中的な解明がなされたことは、本論文の重要な成果と言える。

第三は、従来の研究においてしばしば指摘されてきた、後期ティリッヒにおける政治思想の後退という問題に対して、『組織神学』自体に政治的問題意識が反映されていることが明らかにされた点である。「神の国」論との関係で論者が行った、「彼がこの時期の思索において、社会的あるいは政治的取り組みを、組織神学体系において行おうとしたと考えることができる」との指摘はきわめて重要である。

その他にも、カイロス論の分析や、終末論の構造や個人の死の問題をめぐる議論など、評価すべき点は少なくない。

もちろん、このように優れたティリッヒ研究と評価できる本論文にも、いくつかの問題点が見いだされる。たとえば、二次的文献の分析に集中するあまり、肝心のティリッヒのテキストの分析が手薄になった箇所が散見される。問題設定が明確な分、やや強引な解釈が見られ、またティリッヒ思想の背景をなすキリスト教思想史に関わる議論も必ずしも十分ではない。しかしこれらの問題点は、膨大な先行研究を正確に読みこなし、後期ティリッヒの複雑な思想を明晰に分析した論者の力量から判断すれば、今後のさらなる研究によって克服可能なものであり、本論文がティリッヒ研究として学界に独創的な貢献をなしたことを否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年4月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。